



第4回 パラグアイ共和国

一番左が深見実枝さん

埼玉県にゆかりがあり、現在海外で活躍している方にその国の紹介をしていただくシリーズ「世界の国からこんにちは」。今回は、開拓農業移住者として南米に渡った深見 実枝さんに移住国「パラグアイ共和国」を紹介していただきます。

“のどか”という言葉がぴったり

パラグアイはちょうど日本の裏側に位置し、飛行機を乗り継いで30時間ほどかかる南米の内陸国です。1936年から日本人の移住が始まり、7か所の移住地と首都アスンシオンを含めて約6000人の日本人及び日系人が住んでいます。亜熱帯気候で年間降雨量が多く、いくつかの大河にも囲まれているため肥沃な土壌に恵まれ、多くの農産物を生み出しています。このため、人々はこのどかで人なつこく、「トランキーロ(のんびりやろうや)！」がみんなの合い言葉です。



テラローシャと呼ばれる赤い大地と大豆畑

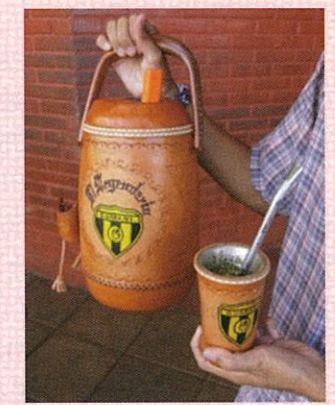
野菜や果物に“日本人”の名前

日本人移住者の長年の苦勞が実り、元々農業がなかったパラグアイで大豆や小麦の栽培に成功し、現在大豆の輸出量は世界第4位です。日本人移住地や首都アスンシオンのスーパーでは日本人移住者が作った豆腐、味噌、醤油、納豆が普通に売られていて、街の至る所で日本食を食べることができます。そして大抵の店では日本語が通じます。



元々パラグアイの主食は牛肉とマンジョカ(キャッサバ)と呼ばれるイモで、野菜を食べる習慣はありませんでした。今では、日本人移住者が野菜栽培を始め、その作り方を教わったパラグアイ人が野菜を生産し、販売しています。黄色いメロンは“メロン・ハポネサ”、白菜は“アセルガ・ハポネサ”というように野菜や果物の名前に“ハポネサ=japonesa(日本人)”という名が多く付けられています。それは野菜の普及に貢献した日本人への敬意の表れで、パラグアイはかなりの親日国です。

豪快な焼き肉と蒸かしたマンジョカが食事の基本



「テレレ」のセット

街中の光景

街に行くと、いたるところでパラグアイ人の人達が大きな容器を持って何か飲んでいる光景を目にします。これは「テレレ」と言って、容器には冷水、コップには“マテ”という乾燥した茶の葉が入っていて、コップに水を注ぎボンビリア(ストローのようなもの)で吸い、仲間と一緒に飲むのがパラグアイの流儀です。邪魔にならないのか、重くないのか、不思議です。



パラグアイ第2の都市エステの中心地。いつも人と車で大賑わいです。

パラグアイでの国民的スポーツはサッカーです。中でもオリンピアとセロという2チームは人気チームで、街のいたるところでそのユニフォームをはじめグッズが売られています。

観光的にはあまり開発されていないパラグアイですが、世界三大瀑布の一つであるイグアスの滝やイエズス会伝道所跡のトリニダー遺跡といった世界遺産があります。ぜひ「穏やかでのんびりとした国」パラグアイに遊びに来てください。

たくさんのご来場ありがとうございました!

国際フェア2016

県内NGO
41団体が参加!

10月2日(日)、さいたまスーパーアリーナで「国際フェア2016」を「コープみらいフェスタin スーパーアリーナ」など3イベントと連携して開催しました。当日は天候もよく、約4万5千人の方々にご来場いただきました。

県内の国際交流・国際協力に関わる41団体が参加し、海外協力団体や在住外国人支援団体などの活動紹介、インド、バングラデシュ、韓国、ロシアなど世界の料理や物産の販売が行われました。

ステージでは、南米アンデス地方の楽器演奏や、インド、タイ、ロシアの民族舞踊などの公演があり、ステージ前に集まった方は珍しそうに写真やビデオを撮影するなど、楽しまれていました。

また、当協会のブースでは、民族衣装の試着などを行い、約150名の方々が楽しまれ、終始大盛況でした。



20名のボランティア
スタッフにご活躍
いただきました

